

而後可削瑋玉之由、以杉原被仰出也。寛正三年九月の條。

十四日、(前略)雲頂御所間西庭、植一株梅樹、相公御覽之而曰、凡方庭植一木、必忌也、所以何、是窮困々之字也、以梅樹一兩株植添之、則可乎之由懇々被仰、尤希有之尊言、是爲我院之寵榮也。文正元年卯月の條。

此種の記事は隨處に散見するのであつて、若夫進んで東求堂、同仁齋以下東府の諸額十一面を作る時の如きは、我も人も彫心鏤骨の果へト〜に疲れた概がある。「雜華室印」印記が果して義政の所用とすれば、その据ゑ所も同じ苦心の末に案出されたのであつて、單に「道有」印記が畫面の下隅を選んで居るのに對して、故らに上方の一角を選んだといふ如きものであるまい。

以上、何等據るべき文獻の徵證ある無く、寧ろ漫然たる一落想を捕へ來つて、強ひて解決すべからざる東洋畫觀賞史上の難問題を解決せんとす。加ふるに論を行つて極めて粗鹵、愈々恥づらくは僭越の誹あらんことを。なほ本論は「善阿」印記にも論及するつもりであつたが、今は心せくまゝに一たび筆を擱き、退いて識者の批評を待つこととする。

附記——校正を畢るに際し偶々、淺野侯爵家寶繪譜を繰き、その夏圭竹林山水圖解説中、「雜華室とは何人の號なるか、諸説紛々として未だ歸著する所なし、然れども東山御物に此印多きを以て見れば、是れ或は義満又は義政の藏印なりしやも知るべからざるなり。」とあるを發見した。さらば義政想像説亦たわれらに始まらず。

前號論文「夏圭畫と傳ふる淺野家の山水圖に就て」について

前號所掲拙稿傳夏圭山水圖論に於てわれらは取返しのかね誤を傳へた。シレン氏が溪山清遠卷を以て長江萬里圖と誤り傳へて居ると言つたのがそれであつて、實は同氏は溪山清遠卷に該當する山水卷の所在をこそ誤つて居れ、これを長江萬里圖とは何處にも呼んで居ないのであつた。そこで論の主旨に影響する所は無いが、假に左の如く訂正を施したい。(脇本)

- (一) 第二四頁下段第七八行「長江萬里圖」の五字を削つて、「River, Mountains and Trees」(江山叢樹圖)と改める。
- (二) 同頁同段第一二行「その圖に關して」の七字を削り、更に其行より六行目「問題の」を「この」と更める。
- (三) 同頁同段第一八行「たゞ茲に」の前に「云々。文中謂ふ所の山水長卷(後者)こそ件の「River, Mountains and Trees」に當るのであるが」の卅字を加へる。
- (四) 同頁同段第十九廿行「ながら」以下「稱し」まで廿八字を削つて「ず、國立博物館なるものの所藏に擬し」と更める。
- (五) 同頁同段第廿三行「が、その構圖」以下、次頁上段第一行「シレン氏の所謂」に至る卅一字を削り、「なほ」の二字、同じく下に「長江萬里圖」の上に「に對するシレン氏の稱呼は」の十二字を加へる。また第二四頁下段第二〇行「長江萬里圖は」の上に「(因に、」の括弧)及び二字を加へる。
- (六) 第二五頁上段第四五行「は著しく異」の六字を削つて、「なつて居る」の下に括弧)を加へる。またその次行「然るに」以下、次々行「ては」までを削り、「何となれば」の五字を記入する。
- (七) 第二五頁下段第九十行「長江萬里圖」の五字を削つて、「River, Mountains and Trees」(江山叢樹圖)と更める。
- (八) 同頁下段第十行「該當するもの」の下に、「と考へられ、シレン氏がこれを國立博物館の所藏として傳へたのは明かに誤」と更める。